



「私は世の終わりまで、いつもあなたがたと共にいる」

2024年4月28日

にほんせいこうかいほちのへせい きょうかい
日本聖公会八戸聖ルカ教会

かんりぼくし しきい こしやま てつや
管理牧師 司祭 ステパノ 越山 哲也

柚月祐子(ゆづき ゆうこ)さんという小説家をご存じですか。岩手県釜石市出身の作家で『臨床心理』『教誨』など多数の著書があります。私は最近柚月さんの小説をよく読んでいます。今読んでいる本は『風に立つ』で、岩手県盛岡市が舞台になっています。岩手南部鉄器工房を舞台に非行少年を預かることになった不器用な父と子の物語です。小説の中に「チャグチャグ馬こ」が登場してきます。私は「チャグチャグ馬こ」は名前ぐらいは知っていましたが実際に見たのは盛岡に来てからでした。「チャグチャグ馬こ」は毎年6月の第2土曜日に開催され、鬼越山蒼前神社(滝沢市鶴飼)から盛岡八幡宮(盛岡市八幡町)までの約14キロを約4時間かけて行進します。盛岡聖公会の向かいにある桜城小学校の校庭が休憩場所になっているので目の前で行進を見ることが出来ます。綺麗に着飾った馬はとても綺麗です。『風に立つ』の中では次のように書かれていました。「(チャグチャグ馬こは)この地域に昔から伝わる、伝統行事だ。岩手は古くから馬の産地として知られ、馬を大切に扱ってきた、かつては軍馬や騎馬、近代では農耕馬が人の暮らしとともにあり、母屋と厩(うまや)が土間で繋がっている南部曲がり屋は、人が馬を家族同様に大切にしてきたことの証だ。」

南部曲がり屋の構造を見て私の心に浮かんできたのは主イエス様がお生まれになったあのベツレヘムの厩です。調べてみると当時の民の家の構造も母屋と厩(家畜小屋)が土間でつながっていて家畜は家族と一緒に共に生活していたようです。ですから厩は母屋と別棟にある離れではなかったのだと想像します。これはイエス様の誕生は庶民と共にあったということを示しているのだと思います。ただ、当時の厩にいた動物は南部曲り家の馬ではなくおそらく牛や羊、ろばだったのでしょう。馬は『風に立つ』でも書かれているように軍馬、騎馬といった「戦いの象徴」「強さの象徴」とし

て位置づけられているからです。平和のみ子としてこの世に来られたイエス様は実際にエルサレムに入城される時は「馬」ではなく「子ロバ」に乗られました。

でも、私は馬自体に注目したいのです。馬を戦争に利用したのは人間であって、本来馬はとても優しく、従順な動物です。私の弟は19歳の時に天に旅立っていましたが、北海道の牧場で馬の世話をしていました。その仕事につくきっかけは一頭の競走馬との出会いでした。名前を「トーカーテイオー」と言います。数ある名馬と呼ばれる競走馬の中でも有名な馬です。弟は中学生の時に毎週日曜日にテレビ中継されていた「スーパー競馬」を見てトーカーテイオーのファンになりました。賭け事としてではなく純粋に馬の持っている気品、優しさ、そして目の美しさに魅了されていきました。引退後に北海道の牧場に私も一緒にテイオーに会いに行ったことがあるのですが本当に優しい馬でした。そんな弟が趣味で描いたテイオーの油絵を私は形見としてずっと大切に牧師館のリビングに飾っています。チャグチャグ馬こ、ベツレヘムの厩、そしてトーカーテイオーの事を思いながら、冒頭の御言葉を黙想しています。世の終わりまでいつも共におられると言って天に昇られた主イエス様、そして神さまは造られたすべての被造物を「極めて良し」とされました。

日々の出来事や地域の人々が大切にしてきた文化によって育まれてきた歴史の中に私たちは生き、そして主は共におられるのではないかと考えています。

